

主題	逆デイサービスがご利用者と職員を変えていく！		
副題	都市部における逆デイサービスの実践がもたらすご利用者、職員への効果		
認知症ケア		人材育成	
研究期間	18月	事業所	特別養護老人ホーム 泰山
発表者：中村 裕子（なかむら ゆうこ）		アドバイザー：中川 千弥（なかがわ ちひろ）	
共同研究者：袴田 マキ子（はかまだ まきこ）			
電 話	03-5622-1165	メール	taizan@crest.ne.jp
FAX	03-5622-1673	URL	http://www.hakusyuu.jimusho.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	当施設は平成14年4月、江戸川区小岩に開設いたしました、開かれた施設を目指しより地域の中へと施設から車で10分位の場所に一般家庭の2LDKとほぼ同規模の「泰山プランチルーム」を平成16年に開設、都心部では諸事情から取り組むことが難しい特養御利用者の逆デイサービスを区内施設の中で唯一実践し、地域の皆様にも活用頂き地域と分断される事のない開かれた、毎日が楽しみのある施設として取り組んでいます。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

「最後まで家族でみたかったのですが・・・」といった言葉をもって特別養護老人ホームに入所される方が多い事は現実であり施設に入所したら家庭にいたような訳にいかないという諦めを持っている、その様な思いを少しでも軽減できるよう、施設から10分位の場所に一般家庭の2LDKとほぼ同じ規模の「泰山プランチルーム」を設置し、逆デイサービスを開始いたしました。開始当初は個別にご家族と一緒に昼食をとったり、近隣の農家の方から頂いた野菜で健康料理を作ったりという、一貫性の無い内容で行ってまいりました。ある日、認知症により衣服の脱着も全介助の御利用者が、お米をといている職員にむかって、私がやりますと自ら袖をたくし上げお米を研ぎ始めました、特養の中では考えられない行動に、施設のアセスメントだけでは計り知れない能力が潜んでいることに気づかされ、それと同時に職員が一人の御利用者と向き合う事の重要さも認識した瞬間でもありました。

その事をきっかけに逆デイサービスにおいて、何が御利用者の日常生活動作の向上、職員の質の向上に効果をあげているのかを検証し、業務全体に生かしていく事の必要性が課題としてあがってきた。

《2. 研究の目標と期待する成果》

逆デイサービスで得られる成果の立証と向上のための実践。家庭で暮らしているような環境の設置で得られる事は何かを検証し、そこで発見できた事を業務全体に取り入れ生かしていく。

① ご利用者のADLの向上②認知症ケアの実践③地域の一員としての認識④職員のご利用者とのかわり方の技術向上⑤アセスメントやケアプランへの反映⑥ご利用者家族の思いへのお手伝い。等、泰山独自のサービスとして確立し、都心部であって運営上設置が多少負担となっても逆デイサービスの取り組みの効果についてに必要性も立証できる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

平成23年4月よりランチ委員会設置

逆デイサービス定期開催

午前10:30～午後1:30

職員は概ね3名(全職員がローテーションで担当)
施設入所72床 短期入所8床のうち体調不良の方を除き参加継続。(グループに分かれ参加する)

①昼食作りを中心とし、献立を立て、食材の準備、片づけ等にもかかわって頂く。②回想法の実施・回想法から聞き取りできた内容について御自宅でしていた事等を行えるよう準備、やってみていただく。③地域活動参加・グループホームや小規模多機能等他事業所の利用者との交流会等開催。④職員が一人のご利用者と一定時間以上関わる事で気づく事の検証。気づきによるアセスメント、ケアプランの見直し、充実。実施した内容状況について個別に記録する。どのような状況で何が行えるようになったのか検証し、施設に戻られても、そういった行為が行えるよう支援していく。認知症に対する予防につながっている事についても継続的に支援する。回想法などで、聞き取りのできた話についても、継続的につけていく。職員の個別のご利用者に対する関わり方についても、気づきを記録し、何が施設での対応と違いどの様にすれば施設内においても継続的に生かしていくことができるのか検証する。

《4. 取り組みの結果と評価》

①施設では、介護拒否、大声等みられる男性利用者は参加時台所前の席に座り調理する音を聞き終始穏やかに微笑んで過ごされていた。②普段レク等参加拒否の女性利用者、献立が餃子の日、御自分から進んで見事な形に餃子を包んでくださった。③施設内とは異なり距離間の近い場所でゆっくり御利用者とお話ができた職員はその利用者について以前より対応が丁寧になり、またその利用者もお話が多くなった。④御家族からは特養に入ったら料理を作ったり、家庭的な空間で過ごす事等できないと思っていたのに、料理が大好きだった母が台所で料理をしている事がすごく

うれしい。又実は母は料理嫌いだったのになぁ〜と苦笑いする御家族も。施設サービスだけではできない会話を御家族と交わせる機会ともなった。認知症が進んでいると諦めていた御家族はこんな事が出来るようになってと喜ばれている。

《5. まとめ》

施設内では気付けなかった、御利用者一人一人の事、些細な事であっても多くの発見があり、人には計り知れない能力が秘められている事がわかった。病気等で身体機能が低下しても、神経疾患で行動がままならなくても、日常生活において培ってきた能力は機能していく事、以前できた機能が回復してくると精神的な部分でも、回復の兆候がみられる。私達職員が気づく事、継続する事、御利用者と共に在る事が重要だと認識した。

《6. 倫理的配慮について》

尚、倫理的配慮については、表記事例の御家族個別に口頭で本研究について確認、本研究内容以外に使用しない事、不利益を被らない事についても説明、了承をいただいております。

《8. 提案と発信》

都心部の諸事情として高い経費に係る事が逆デイ等の妨げになっておりますが、社会福祉法人は誰もが何時でも安心して利用できる場所であるべきと考えております。特養に入っても自宅にいても、同じ様な時間を過ごせる環境作り、個々の思いを大切にする事、家族も知人も一緒に利用できる等、多機能な場所でありたいと考えています。今後も地域の中で生活を感じて頂ける特養を目指し取り組んでまいります。

【メモ欄】